

橋 姫

渋谷栄一 訳

第一章 宇治八の宮の物語 隠遁者八の宮

「第一段 八の宮の家系と家族」

その頃、世間から忘れられていらつしやうした古宮がおいでになった。母の里方なども、立派な家柄でいらつしやうして、特別の地位につくべき評判などがあつたが、時勢が変わつて、世間から冷たく扱われなかつた騒ぎに、かえつてその声望も衰え、ご後見の人びとなども何となく恨めしい思いをして、それぞれの理由で、政界から退き去り退き去りして、公私ともに頼る人がなくなり、孤立していらつしやるようである。

北の方も、昔の大臣の姫君であつたが、しみじみと心細く、両親がお考えになつていらつしやうした事などを思い出さないと、譬えようもない悲しいことが多いが、深いご親密な夫婦仲の又とないのだけを、憂世の慰めとして、お互いにこの上なく頼り合つていらつしやうした。

幾年もたつたのに、お子がお出来にならなくて気がかりだつたので、所在ない寂しい慰めに、「何とかして、かわいらしい子が欲しいものだ」と、宮が時々お思いになりおつしやうしていたところ、珍しく、女君でとてもかわいらしい子がお生まれになった。

この子をこの上なくかわいいと思つて大切にお育て申していらつしやうしたところに、また続いて妊娠なさつて、今度は男の子であつて欲しい「などとお思いになつたが、同じく女の子で、無事には出産なさつたが、とてもひどく産後の肥立ちが悪くてお亡くなりになつてしまつた。宮は、驚き途方に暮れなされる。

「第二段 八の宮と娘たちの生活」

「年月を過すにつけても、まことに暮らしにくく、堪え難いことが多い世の中だが、見捨てることのできないといふ人たちのご様子、人柄に、心を引き止められて、過ごして来たのだが、独り残つて、ますます味気ない感じがするな。幼い子供たちをも、独りで育てるには、身分格式のある身なので、まことに愚からしく、体裁の悪いことであらう」

とご決心なさつて、出家も遂げたくお思いになつたが、見譲る人もなく残して行くのを、ひどくおためらいになりながら、年月がたつと、それぞれ成長なさつていく様子、器量が、美しく素晴らしいので、朝夕のお慰めとして、いつしか年月をお過ごしになる。

後からお生まれになつた姫君を、お仕えする女房たちも、「まあ、悪い時にお生まれになつて」などと、ぶつぶつ呟いては、身を入れてお世話申し上げなかつたが、臨終の床で、何お分りにならない時ながら、この子をとてもお氣の毒にと思つて、

「ただ、この姫君をわたしの形見とお思いになつて、かわいがつてください」とだけ、わずか一言、宮にご遺言申し上げなされたので、前世からの約束も辛い時だが、そうなるはずの運命だつたのだからと、ご臨終と見えた時まで、とてもかわいそうにと思つて、気がかりにおつしやうしたことよ」とお思い出しになりながら、この姫君を特に、とてもかわいがり申し上げなされる。器量は本当にとてもかわいらしく、不吉なまで美しくいらつしやうした。姫君は、氣立てはもの静かで優雅な方で、外見も態度も、氣高く奥ゆかしい様子でいらつしやる。大切にしたい高貴な血筋は勝つていて、姉妹どちらも、それぞれに大切にお育て申し上げなされるが、思い通りに行かないことが多く、年月とともに、宮邸の内も何となく段々と寂しくばかりなつて行く。

仕えていた女房も、頼りにならない氣がするので、辛抱することができず、次々と辞めて去つて行き、若君の御乳母も、あのような騒動に、しつかりした人を、選ぶことがお出来になれなかつたので、身分相應の浅はかさで、幼い君をお見捨て申し上げてしまつたので、ただ宮がお育てなされる。

「第三段 八の宮の仏道精進の生活」

そつは言つても、広く優雅なお邸の、池、築山などの様子だけは昔と変わらないうで、たいそつひどく荒れて行くのを、所在なく眺めていらつしやる。家司なども、しつかりとした人もいないままに、草が青々と茂つて、軒の忍草が、わがもの顔に一面に青みわたつてゐる。四季折々の花や紅葉の色や香を、同じ気持ちでご賞美なさつたことで、慰められることも多かつたが、ますます寂しく、頼みとする人もないままに、持仏のお飾りだけを特別におさせになつて、明け暮れお勤めなさる。

このような足手まといたちにかかずらつてゐるのでさえ、心外で残念で、自分ながらも思つに任せない運命であつた」と思われるが、まして、「どうして、世間の人並みに今更婚などを」とばかり、年月とともに、世の中をお離れになり、心だけはすつかり聖におなりになつて、故君がお亡くなりになつて以後は、普通の人のような気持ちなどは、冗談にもお思ひ出しななかつた。

「どうして、そんなにまで。死別の悲しみは、二つと世に例のないようにはかり、思われるようだが、時がたてば、そんなではかりいられようか。やはり、普通の人と同じようなお心づかいをなさつて、とてもこのような見苦しく、頼りない宮邸の内も、自然と整つて行くこともあるかも知れません」と、人は非難申し上げて、何やかやと、もつともらしく申し上げること、縁故をたどつて多かつたが、お聞き入れにならなかつた。

御念誦の合間合間には、この姫君たちを相手にし、だんだん成長なさると、琴を習わせ、暮を打ち、偏つぎなどの、とりとめない遊びにつけても、二人の氣立てを拝見なさると、姫君は、才氣があり、落ち着いて重々しくお見えになる。若君は、おつとりとかわいらしい様子をして、はにかんでゐる様子に、とてもかわいらしく、それぞれでいらつしやる。

「第四段 ある春の日の生活」

春のうららかな日の光に、池の水鳥たちが、互いに羽を交わしながら、めいめいに囀つてゐる声などを、いつもは、何でもないと御覧になつて

いたが、つがいの離れずにゐるのを羨ましく眺めなつて、姫君たちに、お琴類をお教え申し上げなさる。とてもかわいらしげで、小さいお年で、それぞれ掻き鳴らしなさる楽の音色は、しみじみとおもしろく聞こえるので、涙を浮かべなつて、

「見捨てて去つて行つたつがいでいた水鳥の雁は、はかないこの世に子供を残して行つたのだろうか。気苦勞の絶えないことだ」

と、目を拭いなさる。容貌がとても美しくいらつしやる宮である。長年のご勤行のために痩せ細りなさつたが、それでも氣品があつて優美で、姫君たちをお世話なさるお気持ちから、直衣の柔らかくなつたのをお召しになつて、つくろわれないご様子、とても恥ずかしくなるほど立派である。

姫君、お硯を静かに引き寄せて、手習いのように書き加えなさるのを、これにお書きなさい。硯には書き付けるものでありません」

とおつしやつて、紙を差し上げなさると、恥じらつてお書きになる。

「どうしてこのように大きくなつたのだらうと思つにも、水鳥のような辛い運命が思い知られます」

よい歌ではないが、その状況は、とてもしみじみと心打たれるのであつた。筆跡は、将来性が見えるが、まだ上手にお書き綴りにならないお年である。

「若君もお書きなさい」

とおつしやる、もう少し幼そうに、長くかかつてお書きになつた。

「泣きながらも羽を着せかけてくださるお父上がいらつしやらなかつたら、わたしは大きくなることはできなかつたでしょうに」

お召し物など皺になつて、御前に他に女房もなく、とても寂しく所在なさうなので、それぞれたいそうかわいらしくいらつしやるのを、不憫でいたわしいと、どうして思われないことがあるうか。お経を片手に持ちなつて、一方では読経しながら唱歌もなさる。

姫君に琵琶、若君に箏のお琴を、まだ幼いけれど、いつも合奏しながらお習いになつてゐるので、聞きにくいこともなく、たいそう美しく聞こえる。

「第五段 八の宮の半生と宇治へ移住」

父帝にも母女御にも、早く先立たれなつて、しつかりしたご後見人が、

取り立てていらつしやらなかつたので、学問なども深くお習いになることができず、まして、世の中に生きていくお心構えは、どうしてご存知でいらつしやつたであらうか。身分の高い人と申す中でも、あきれられるくらい上品であつたりした、女性のようであらつしやるので、古い世からのご宝物や祖父大臣のご遺産や、何やかやと尽きないほどあつたが、行方もなくあつけなく無くなつてしまつて、ご調度類などだけが、特別にきちんとして多くあつた。

参上してご機嫌伺いしたり、好意をお寄せ申し上げる人もいない。所在のないにまかせて、雅楽寮の樂師などのような、優れた人を召し寄せ召し寄せなさつては、とりとめない音楽の遊びに心を入れて、成人なさつたので、その方面では、たいそう素晴らしく優れていらつしやつた。

源氏の大殿の御弟君であらつしやつたが、冷泉院が春宮であらつしやつた時に、朱雀院の太后が、あるまじき企みを、ご計画になつて、この宮を、帝位をお継ぎになるように、ご威勢の盛んな時、ご支援申し上げなさつた騒動で、つまらなく、あちら方とのお付き合いからは、遠ざけられておしまいになつたので、ますますあちら方のご子孫の御世となつてしまつた世の中では、交際することもお出来になれない。また、ここ数年、このような聖にすつかりなつてしまつて、今はこれまでと、万事をお諦めになつていた。こつしているうちに、お住まいになつていた宮邸が焼けてしまつた。不幸続きの人生の上に、あきれれるほどがつかりして、お移り住みなさるような適当な所が、適当な所もなかつたので、宇治という所に、風情のある山荘をお持ちになつていたのでお移りになる。お捨てになつた世の中だが、今は最後と住み離れることを悲しく思わずにはいらつしやれない。

網代の様子が近く、耳もとにうるさい川の辺りで、静かな思いに相応しくない点もあるが、どうすることもできない。花や紅葉や、川の流れにつけても、心を慰めるよすがとして、いよいよ物思いに耽るより他のことがないこつして世間から隔絶して籠もつてしまつた野山の果てでも、亡き北の方が生きていらつしやつたら」と、お思い申し上げなさらない時はなかつた。「北の方も邸も煙となつてしまつたが、どうしてわが身だけがこの世に生き残つているのだらう」

生きている効もないほど、恋い焦がれていらつしやるよ。

第二章 宇治八の宮の物語 薫、八の宮と親交を結ぶ

「第一段 八の宮、阿闍梨に師事」

ますます、山また山を隔てたお住まいに、訪問する人もいない。賤しい下衆など、田舎びた山住みの者たちだけが、まれに親しくお仕え申し上げる。峰の朝霧が晴れる時の間もなく、明かし暮らしなさつてはいるが、この宇治山に、聖めいた阿闍梨が住んでいた。

学問がたいそうできて、世人の評判も低くはなかつたが、めつたに朝廷の法要にも出仕せず、籠もつていたところに、この宮が、このように近い所にお住みになつて、寂しいご様子で、尊い仏事をあそばしながら、経文を読み習つていらつしやるので、尊敬申し上げて、常に参上する。

長年学んでお知りになつた事柄などで、深い意味をお説き申し上げて、ますますこの世が仮の世で、無意味なことをお教え申し上げるので、

「心だけは蓮の上に乗つて、きつと濁りのない池にも住むだろうことを、とてもこのように小さい姫君たちを見捨てる気がかりだけに、一途に僧形になることもできないのだ」

などと、隔意なくお話なさる。

「第二段 冷泉院にて阿闍梨と薫語る」

この阿闍梨は、冷泉院にも親しく伺候して、御経などお教え申し上げる僧なのであつた。京に出た折に参上して、いつものように、しかるべき教典などを御覧になつて、ご下問あそばさることがある折に、

「八の宮が、たいそうご聰明で、教典のご学問にも深く通じていらつしやいますなあ。そのようになるはずの方として、お生まれになつたのでいらつしやる方なのでしょうが。お考えが深く悟り澄ましていらつしやるほどは、本当の聖の心構えのようにお見えになります」と申し上げる。

「まだ姿は変えていらつしやらないのか。俗聖とか、ここの若い人達が名付けたというのは、殊勝なことだ」などと仰せになる。

宰相中将も、御前に伺候なさって、自分こそは、世の中を実に面白くなく悟つていながら、その行いなどを、人目につくほどは勤めず、残念に過ごして来てしまった」と、人知れず反省しながら、在俗のまま聖におなりになる心構えとはどのようなものか」と、耳を止めてお聞きになる。

「出家の本願は、もともとお持ちでいらつしやうたが、つまらないことに心がにぶり、今となつては、お気の毒な姫君たちのお身の上を、お見捨てになることができないと、嘆いておられます」と奏す。

そうは言つても、音楽は賞美する阿闍梨なので、なるほど、また、この姫君たちが、琴を合奏なさつて楽しんでいらつしやるのが、川波と競つて聞こえますのは、たいそう興趣あつて、極楽もかくやと想像されますね」

と、古風に誉めるので、院の帝はほほ笑みなさつて、

「そのような聖の近くにお育ちになつて、この世の方面のことは、暗かろうと想像されるが、興味あることだね。気がかりで見捨てることができず、苦にしていらつしやるだろうことが、もし、少しでも後に自分が生き残つていようであつたら、後見役をお譲りなさらないだろうか」

などと仰せになる。この院の帝は、第十の皇子でいらつしやるのであつた。朱雀院が、故六条院にお預け申し上げなさつた入道宮のご先例をお思い出しになつて、あの姫君たちを欲しいものだ。所在ない遊び相手として「な」とお思いになるのであつた。

「第三段 阿闍梨、八の宮に薫を語る」

中将の君は、かえつて、親王が悟り澄ましていらつしやるお心づかいを、お目にかかつて、お伺いしたいものだ」と思つて気持ちが深くなつた。そうして阿闍梨が山に帰っていくときにも、

「きつと参つて、お教えて戴けるよう、まずは内々にでも、ご意向を伺つてください」

などとお頼みになる。

院の帝が、御使者を介して、お気の毒な御生活を、人伝てに聞きまして、など申し上げなさつて、

「世を厭う気持ちは宇治山に通じておりますが、幾重にも雲であなたが隔ていらつしやるのでしょうか」

阿闍梨は、この御使者を先に立てて、あちらの宮に参上した。並々の身分で、訪問してよい人の使いでさえまれな山蔭なので、実に珍しく、お待ち喜びになつて、場所に相応しい御馳走などを用意して、山里らしい持てなしをなさる。お返事は、

「世を捨てて悟り澄ましているではありませんが、世を辛いものと思ひ宇治山に暮らしております」

仏道修業の方面については謙遜して申し上げなさつていたので、やはり、この世に恨みが残つていたな」と、いたわしく御覧になる。

阿闍梨は、中将の君が、道心深くいらつしやることなどを、お話し申し上げて、

「経文などの真意を会得したい希望が、幼い時から深く思いながら、やむをえず世にあるうちに、公私に忙しく日を過ごし、わざわざ部屋に閉じ籠まつて経を読み習ひ、だいたいが大して役にも立たない身として、世の中に背き顔をしているのも、遠慮することではないが、自然と修業も怠つて、俗事に紛れて過ごして来たが、たいそうご立派なご様子を承つてから、このように心にかけて、お頼み申し上げるのです、などと、熱心に申し上げます。さいました」などとお話し申し上げます。

宮は、

「世の中を仮の世界と思ひ悟り、厭わしい心がつき始めたことも、自分自身に不幸がある時、大方の世も恨めしく思ひ知るきつかけがあつて、道心も起こることのようですが、年若く、世の中も思ひ通りに行き、何事も満足しないことはないと思はれる身分で、そのようにまた、来世までを、考えていらつしやるのが立派です。

わたしは、そうなるべき運命なのか、ただ厭ひ離れよと、格別に仏などのお勧めになるような状態で、自然と、静かな思ひが適つて行きましたが、余命少ない気がするのに、ろくに悟りもしないで、過ぎてしまひそんなのを、過去も未来も、全然悟るところがなく思はれるが、かえつて、恥入るような仏法の友の方で、いらつしやいますね」

などおつしやつて、お互いにお手紙を交わし、自分自身でも参上なさる。

「第四段 薫、八の宮と親交を結ぶ」

なるほど、聞いていたよりもいたわしく、お暮らしになつてゐる様子をはじめとして、まことに飯の粗末な庵で、そう思うせいか、簡素に見えた同じ山里と言つても、それなりに興味惹かれそうな、のんびりとしたところもあるのだが、実に荒々しい水の音、波の響きに、物思いを忘れたり、夜などは、気を許して夢をさえ見る間もなさそうに、風がものすごく吹き払つていた。

「仏道修業者めいた人のためには、このようなことも、気にならないことなのであるが、女君たちは、どのような気持ちで過ごしていらつしやるのだらう。世間一般の女性らしく優しいところは、少ないのではなからうか」と推量されるご様子である。

仏間との間に、襖障子だけを隔てていらつしやるようである。好色心ある人は、気のあるそぶりをして、姫君のお気持ちを見たく、やはりどのようなものかと、興味惹かれるご様子である。

けれども、そのような方面を思い離れた願いで、山深くお尋ね申した目的もなく、好色がましいいかげんなことを口に出してふざけるのも、主旨と違うのではないか」などと反省して、宮のご様子のまことにいたわしいのを、丁重にお見舞い申し上げなさり、度々参上しては、思つていたように、在俗のまま山に籠もり修業する深い意義、経文などを、特に賢ぶることなく、まことよくお聞かせになる。

聖めいた人、学問のできる法師などは、世の中に多くいるが、あまりに堅苦しく、よそよそしい徳の高い僧都、僧正の身分は、世間的に忙しくそつけないで、物事の道理を問いたすにも、仰々しく思われなさる。

また、これといったこともない仏の弟子で、戒律を守つてゐるだけの尊さはあるが、雰囲気は賤しく言葉がなまつて、不作法に馴れ馴れしいのはとても不愉快で、昼は、公事に忙しくなどしながら、ひっそりとした宵のころに、側近の枕許などに召し入れてお話しなさるにつけても、まことにやはりむさ苦しい感じばかりがするが、たいそう気品高く、いたいたしい感じで、おっしゃる言葉も、同じ仏のお教えも、分りやすい譬えをまぜて、たいそうこの上なく深いお悟りというわけではないが、身分の高い方

は、物事の道理を悟りなさる方法が、特別でいらつしやつたので、だんだんとお親しみ申し上げなさる度毎に、いつもお目にかかつていたく思つて、忙しくなどして日を過ごしている時は、恋しく思われなさる。

この君が、このように尊敬申し上げなさるので、冷泉院からも、常にお手紙などがあつて、長年、噂にもまつたくお聞きなされず、ひどく寂しうであつたお住まいに、だんだん来訪の人影を見る時々がある。何かの時に、お見舞い申し上げなさること、大したもの、この君も、まず適当なことにかこつけては、風流な面でも、経済的な面でも、好意をお寄せ申し上げなさること、三年ほどになつた。

第三章 薫の物語 八の宮の娘たちを垣間見る

「第一段 晩秋に薫、宇治へ赴く」

秋の末方に、四季毎に当ててなさるお念仏を、この川辺では、網代の波も、このころは一段と耳うるさく静かでない、と云つて、あの阿闍梨が住む寺の堂にお移りになつて、七日程度勤行なさる。姫君たちは、たいそう心細く、何もすることのない日が増えて物思いに耽つていらつしやるころ、中将の君が、久しく参らなかつたなど、お思い出し申されるままに、有明の月が、まだ夜深く差し出たころに出立して、たいそうこっそりと、お供に人などもなく、質素にしておいでになつた。

川のこちら側なので、舟なども煩わさず、御馬でいらつしやつたのであつた。山に入つて行くにつれて、霧で塞がつて、道も見えない生い茂つた木の中を分け入つて行かれると、とても荒々しく吹き競つ風に、ほろほろと散り乱れる木の葉の露が散りかかるのも、たいそう冷たくて、自分から求めてひどく濡れておしまいになつた。このような外歩きなども、あまり御経験ないお気持ちには、心細く興味深く思われなさつた。

山風の風に堪えない木の葉の露よりも、妙にもろく流れるわたしの涙よ「山賤が目覚ますのも厄介だと思つて、随身の声もおさせにならない。柴の籬を分けて、どことなく流れる水の流れを踏みつける馬の足音も、やは

り、人目につかないようにと気をつけていらっしやったのに、隠すことのできない御匂いが、風に漂って、どなたの香かと目を覚ます家々があるのであつた。

近くなるころに、何の琴とも聞き分けることができないうたが、その機会がなくて、親王の御琴の音色の評判高いのも、聞くことができないでいた。ちょうど良い機会だろう」と思いながらお入りになると、琵琶の音の響きであつた。「黄鐘調」に調律して、普通の掻き合わせだが、場所柄か、耳馴れない気がして、掻き返す撥の音も、何となく清らかで美しい。箏の琴は、しみじみと優美な音がして、途切れ途切れに聞こえる。

「第二段 宿直人、薫を招き入れる」

暫く聞いていたので、隠れていらしたが、お気配をはつきりと聞きつけて、宿直人らしい男で、何か愚直そうなのが、出て来た。

「いかじかの理由で籠もっていらっしやいます。お手紙を差し上げましよう」と申す。

「なに、その必要はない。そのように日数を限った御勤行のところを、お邪魔申し上げるのもいけない。このように濡れながらわざわざ参つて、むなしく帰る嘆きを、姫君の御方に申し上げて、お気の毒におつしやっていただけなら、慰められるでしよう」

とおつしやると、醜い顔がにこつとして、

「申し上げさせていただきましよう」と言つて立つのを、

「ちよつと待て」と召し寄せて、

「長年、人伝てにばかり聞いて、聞きたく思つていたお琴の音を、嬉しい時だよ。暫くの間、少し隠れて聞くのに適当な物蔭はないか。不適切にも出過ぎて参上したりする間に、皆が琴をお止めになつては、まことに残念であらう」

とおつしやる。そのお振る舞い、容姿容貌が、そのようなつまらない男の考えでも、実に立派に恐れ多く見えたので、

「誰も聞かない時には、明け暮れこのようにお弾きになります、下人であつ

ても、都の方面から参つて、加わっている人がある時は、お弾かせなさりません。だいたい、こうして女君たちがいらっしやることをお隠しになり、世間の人にお知らせ申すまいと、お考えになりおつしやっているのです」

とお申し上げるので、ほほ笑みなさつて、
「つまらないお隠しだ。そのようにお隠しになるといふが、誰も皆、類まねな例として、聞き出すに違ひないだろうに」とおつしやつて、やはり案内せよ。わたしは好色がましい心などは、持つていないのだ。こうしていらっしやるご様子が、不思議で、なるほど、並々には思えないのだ」
と懇切におつしやると、

「ああ、恐れ多い。物をわきまぬ奴と、後から言われることがありましよう」と言つて、あちらのお庭先は、竹の透垣を立てめぐらして、すべて別の塀になつてゐるのを、教えてご案内申し上げた。お供の人は、西の廊に呼び止めて、この宿直人が相手をする。

「第三段 薫、姉妹を垣間見る」

あちらに通じてゐるらしい透垣の戸を、少し押し開けて御覧になると、月が美しい具合に霧がかかっているのを眺めて、簾を短く巻き上げて、女房たちが座つてゐる。簀子に、たいそう寒そうに、瘦せてみすばらしい着物の女童一人と、同じ姿をした大人などが座つてゐた。内側にゐる人一人、柱に少し隠れて、琵琶を前に置いて、撥をもてあそびながら座つてゐたところ、雲に隠れてゐた月が、急にぱあつと明るく差し出たので、

「扇でなくて、これでもつても、月は招き寄せられさうだわ」

と言つて、外を覗いてゐる顔、たいそうかわいらしくつやつやしてゐるのであらう。

添い臥している姫君は、琴の上に身をもたれかけて、

「入り目を戻す撥というのはありますが、変わったことを思いつきなさるお方です」と

と言つて、ちよつとほほ笑んでいる様子、もう少し落ち着いて優雅な感じがした。

「そこまですでなくとも、これも月に縁のないものではないわ」

などと、とりとめもないことを、気を許して言い合つていらつしやる二人の様子、まったく見ないで想像していたのとは違つて、とても可憐で親しみが持て感じがよい。

「昔物語などに語り伝えて、若い女房などが読むのを聞くにも、必ずこのよくなことを言つていたが、そのようなことはないだろう」と、想像していたのに、なるほど、人の心を打つような隠れたことがある世の中だつたのだな」と、心が惹かれて行きそうである。

霧が深いので、はつきりと見ることもできない。再び、月が出て欲しいとお思ひになつていた時に、奥の方から、「お客様です」と申し上げた人がいたのであるうか、簾を下ろして皆入つてしまつた。驚いたふうでもなく、ものやわらかに振る舞つて、静かに隠れた方々の様子、衣擦れの音もせず、とても柔らかくなつておいたわしい感じで、ひどく上品で優雅なのを、しみじみとお思ひなさる。

静かに出て、京に、お車を引いて参るよう、人を走らせた。先ほどの男に、「具合悪い時に参つてしまいましたか、かえつて嬉しく、思いが少し慰められました。このように参つた旨を申し上げます。ひどく露に濡れた愚痴も申し上げます」

とおつしやると、参上して申し上げます。

「第四段 薫、大君と御簾を隔てて対面」

このように見られたらどうかとはお考えにもならず、気を許して話していたことを、お聞きになつたらどうかと、実にかたいそう恥ずかしい。不思議と、香ばしく匂う風が吹いていたのを、思ひかけない時なので、気がつかなくなつた迂闊さよ」と、気も動転して、恥ずかしがつていらつしやる。

「ご挨拶などを伝える人も、とても物馴れていない人のようなので、時と場合によつて、何事も臨機応変に」とお思ひになつて、まだ霧でよく見えない時なので、先ほどの御簾の前に歩み出て、お座りになる。

山里めいた若い女房たちは、お答えする言葉も分ならず、お敷物を差し出す恰好も、たどたどしそつである。

「この御簾の前では、きまり悪つございますよ。一時の軽い気持ちぐらいでは、こんなにも尋ねて参れないような難しい険しい山路と存じておりましたが、これは変わつたお扱いで。このように露に濡れ濡れ何度も参つたら、いくらなんでも、ご存知でいらつしやるうと、頼もしく存じております」と、とてもまじめにおつしやる。

若い女房たちが、すらすらと何か申し上げることもできず、正体もないほど恥ずかしがつているのも、見ていられないので、年配の女房で奥に寝ている者を起こし出している間、ひまどつて、わざとらしいのも気の毒になつて、

「何事も存じませんわたくしどもで、知つたふうに、どうして、お答え申し上げますられましようか」

と、たいそう優雅で、上品な声をして、引つ込みながらかすかにおつしやる。

「実は分かつておいでなのに、辛さを知らないふりをするのも、世の習いと存じておりますが、ほかならぬあなたが、あまりにそらぞらしいおつしやりようをなさるのは、残念に存じます。めつたになく、何事につけ悟り澄ましていらつしやるご生活などに、ご一緒申されておいでのご心中は、万事涼しく推量されますから、やはり、このように秘めきれない気持ちの深さ浅さも、お分かりいただけることは、効がございませう。

世の常の好色がましいことは、違つてお考えいただけませんか。そのようなことは、ことさら勧める人がありまして、言う通りにはならない決心の強さです。

自然とお聞き及びになることもございませう。所在なくばかり過ごしております世間話も、聞いていただくお相手として頼み申し上げ、またこのように、世間から離れて、物思ひあそばしていられるお心の気紛らわしには、そちらからそつと、話しかけてくださるほどに親しくさせていただけましたら、どんなにか嬉しいことでもございませう」

などと、たくさんおつしやると、遠慮されて、答えにくくて、起こした老人が出て来たので、お任せになる。

「第五段 老女房の弁が応対」

たえようもなく出しゃばって、

「まあ、恐れ多いこと。失礼なご座所でございますこと。御簾の中にどうぞ若い女房たちは、物の道理を知らないようでございます」

などと、ずけずけと言う声が年寄りみているのも、きまり悪く姫君たちはお思ひになる。

「まことに妙に、世の中に暮らしていらつしやる方のお仲間入りもなさらないご様子で、当然訪問してよい方々でさえ、人並み扱いにご訪問申される方々も、お見かけ申さないようになりなつて行くようですので、もつたいないお志のほどを、人数にも入らないわたしでも、意外なとまでお思ひ申し上げさせていただいておりますが、若い姫君たちもご存知でありながら、お申し上げなすりにくいのでございましょうか」

と、まことに遠慮なく馴れ馴れしいのも、小憎らしい一方で、感じはた

「まこと取りつく島もない気がしていたが、嬉しいおつしやりようです。何事も、なるほど、ご存知であつた頼もしさは、この上ないことです」

とおつしやつて、寄り掛かつて座つていらつしやるのを、几帳の側から見ると、曙の、だんだん物の色が見えてくる中で、なるほど、質素にしてい

「第六段 老女房の弁の昔語り」

この老人は泣き出した。

「出過ぎた者とお咎めもあるやと、存じて控えておりますが、しみじみとした昔のお話の、どのような機会にお話申し上げ、その一部分を、ちらつとお耳に入れたいと、長年念誦の折にも、祈り続けてまいつた効があつてでしょうか、嬉しい機会でございますが、まだのうちから涙が込み上げて来て、申し上げることができませんわ」

と、震えている様子、ほんとうにひどく悲しいと思つていた。だいたい、年老いた人は、涙もろいものとは見聞きなさつていたが、と

てもこんなにまで思つているのも、不思議なお思ひになつて、

「ここに、このように参ることは、度重なつたが、このように物のあわれをご存知の方がいなくて、露つぽい道中で、一人だけ濡れました。嬉しい機会の方です。すつかりおつしやつてください」とおつしやる。

「このような機会は、ございませぬ。また、ございまして、明日を知らない寿命を、当てにできません。それでは、ただ、このような老人が、世の中におつただけ、ご存知いただきたい。

三条の宮におりました小侍従、亡くなつてしまつたと、ちらつと聞きました。その昔、親しく存じておりました同じ年配の者は、多く亡くなりました晩年に、遠い田舎から縁故を頼つて上京して来て、この五、六年のほど、ここにこのようにしてお仕えております。

ご存知ではないでしょう、最近、藤大納言と申すお方の御兄君で、右衛門督でお亡くなりになつた方は、何かの機会にか、あのお方の事として、お伝え聞きなさつてゐることはございましょう。

お亡くなりになつて、まだいかほども経つていないような気がかりがします。その時の悲しさも、まだ袖が乾く時の間もなく存じられますが、このように大きくおなりあそばしたお年のほども、夢のような思われま

あの故権大納言の御乳母でございました人は、弁の母でございました。朝夕に身近にお仕えいたしましたところ、物の数にも入らない身ですが、誰にも知らせず、お心にあまつたことを、時々ちらつとお漏らしになりましたが、いよいよお最期とおなりになつたご病気の末頃に、呼び寄せて、わずかにご遺言なされたことがございましたが、ぜひお耳に入れなければならぬ子細が、一つございませぬけれども、これだけ申し上げましたので、さらに続きをとお思ひになるお考えがございましたら、改めてごゆつくり、すつかりお話し申し上げます。若い女房たちも、みつともなく、出過ぎた者と、非難するのも、もつともなことですから」

と言つて、さすがに最後まで言わずに終わつた。

不思議な、夢語り、巫女などのような者が、問はず語りをしているように、珍しい話と思わずにはいらつしやれないが、しみじみと本當のことが知りたいと思ひ続けて来た方面のことを申し上げたので、ひどく先が知りたいが、なるほど、人目も多いし、不意に昔話にかかわつて、夜を明かし

てしまつのも、無作法であるから、

「はつきりと思ひ当たるふしは、ないものの、昔のことと聞きますのも、心をうちます。それでは、きつとこの続きをお聞かせください。霧が晴れていったら、見苦しいやつした姿を、無礼のお咎めを受けるに違いない姿なので、思つておりますよに行かず、残念でなりません」

とおつしゃつて、お立ちになると、あのいらつしゃる寺の鐘の音が、かすかに聞こえて、霧がたいそう深く立ち込めていた。

「第七段 薫、大君と和歌を詠み交して帰京」

峰の幾重にも重なつた雲の、思ひやるにも隔てが多く、心痛むが、やはり、この姫君たちのご心中もおいたわしく、物思ひのありたけを尽くしていられよう。あのように、とても引つ込みがちでいらつしゃるのも、もつともなことだ」などと思われる。

「夜も明けて行きますが帰る家路も見えませぬ。尋ねて来た槇の尾山は霧が立ち込めていますので、心細いことですね」

と、引き返して立ち去りがたくしていらつしゃる様子を、都の人で見慣れた人でさえ、やはり、たいそう格別にお思ひ申し上げているのに、まして、どんなにか珍しく思わないことあるうか。お返事を申し上げにくそうに思つているので、いつものように、たいそう慎ましうにして、

「雲のかかつている山路を秋霧がますます隔てているこの頃です」

少し嘆いていらつしゃる様子、並々ならず胸を打つ。

何ほど風情の見えない辺りだが、なるほど、おいたわしいことが多くある中にも、明るくなって行くと、いくら何でも直接顔を合わせる感じがして、

「なまじお言葉を聞いたために、途中までしか聞けなかつた思ひの多くの残りば、もう少しお親しみになつてから、恨み言も申し上げさせていただきましょう。一方では、このように世間の人並みに、お扱いなさることは、意外にもお分かりにならない方だと、恨めしくて」

と言つて、宿直人が準備した西面にいらつしゃつて、眺めなさる。

「網代では、人が騒いでいるようだ。けれど、氷魚も寄つて来ないのだろう

か。景気の悪そうな様子だ」

と、お供の人々は見知つていて言つ。

「粗末な幾隻もの舟に、柴を刈り積んで、それぞれ何ということもない生活に、上り下りしている様子に、はかない水の上に浮かんでいるが、誰も皆考えてみれば同じことである、無常の世だ。自分は水に浮かぶような様でなく、玉の台に落ち着いている身だと、思える世だろうか」と思ひ続けられずにはいられない。

硯を召して、あちらに申し上げなさる。

「姫君たちのお寂しい心をお察しして、浅瀬を漕ぐ舟の棹の、涙で袖が濡れました。物思ひに沈んでいらつしゃることでしょう」

と言つて、宿直人にお持たせになつた。たいそう寒そうに、鳥肌の立つ顔して持つて上る。お返事は、紙の香などが、いいかげんな物では恥ずかしいが、早いだけをこのような場合は取柄としよう、と思つて、

「棹さして何度も行き来する宇治川の渡し守は朝夕の寒に、濡れてすっかり袖を朽ちさせていることでしょう。身まで浮かんで」

と、実に美しくお書きになつていらつしゃた。申し分なく感じの良い方だ」と、心が惹かれたが、

「お車を牽いて参りました」

と、供人が騒がしく申し上げるので、宿直人だけを召し寄せて、

「お帰りあそばしたころに、きつと参りましょう」
などとおつしゃる。濡れたお召し物は、皆この人に脱ぎ与えなつて、取りにやつたお直衣にお召し替えになつた。

「第八段 薫、宇治へ手紙を書く」

老人の話が、気にかかつて思ひ出される。思つていたよりは、この上なく優れていて、立派だつたご様子が、面影にちらつて、やはり、思ひ離れたいこの世だ」と、心弱く思ひ知らされる。

お手紙を差し上げなさる。懸想文めいてではなく、白い色紙で厚ぼつた紙に、筆は念入りに選んで、墨つきも見事にお書きになる。

「ぶしつけなようではないかと、むやみに差し控えまして、話し残したこと

が多いのも辛いことです。一部お話し申し上げておいたように、今からは、御簾の前も、気安くお許しくださいますように。お山籠もりが済みます日を伺っておきまして、霧に閉ざされた迷いも、晴れることでしょう。」

などと、たいそう生真面目にお書きになっている。左近将監である人をお使いとして、

「あの老人を訪ねて、手紙を渡すように。」

とおっしゃる。宿直人が寒そうにしてうろろしていたのなど、気の毒にお思いやりになって、大きな松破子のようなものを、たくさん届けさせなされる。

翌日、あちらのお寺にも差し上げなされる。山籠もりの僧たち、近頃の嵐には、とても心細く辛いだろうに、そうして籠もっていらっしゃる間のお布施を、なさらねばならないだろう」とご想像になつて、絹、綿など多かつた。ご勤行が終わつて、下山なされる朝だつたので、修行者たちに、綿、絹、袈裟、法衣など、総じて一領ずつ、いるすべての大徳たちにお与えになる。

宿直人は、お脱ぎ捨てになつた、優艶で立派な狩のお召物の、何ともいえない白い綾織物の、柔らかでいいようもなく匂つているのを、そのまま身に着けて、身は変えることのできないものなので、似つかわしくない袖の香を、会う人ごとに怪しまれたり、褒められたりするの、かえつて身の置きどころがないのであつた。

思いのままに、身を気軽に振る舞うこともきず、とても気持ち悪いまでに、人が驚く匂いを、無くしたいものだと思つた、大層な方の御移り香なので、洗い捨てることもできないのが、困つたものであるよ。

「第九段 薫、匂宮に宇治の姉妹を語る」

君は、姫君のお返事が、とてもよく整つていておおようなのを、風情があると御覧になる。父宮にも、「このようにお手紙がありました」などと、女房たちが申し上げ、御覧に入れると、

「いや、なに。懸想めいてお扱いなされるのも、かえつて嫌なことであろう。普通の若い人に似ないご性格のようだから、亡くなつた後などと、一言ほめかしておいたので、そのような気持ちで、心にかけているのだろう。」

などとおっしゃるのであつた。ご自身も、さまざまなお見舞い品が、山寺にあふれたことなどをおっしゃつていらっしゃるに、参ろうとお思いになつて、「二の宮が、このように奥まつた所に住む女が、会えば見まさりするの、おもしろいことだろうと、せいぜい想像するだけであつて、いられるも、羨ましがらせて、お気持ちを揉ませ申そう」とお考えになつて、のんびりした夕暮に参上なされた。

いつもものように、いろいろなお話をひとり交わしなされる折に、宇治の宮のことを話し出して、見た早朝の様子などを、詳しく申し上げなされると、宮は、切に興味深くお思いになつた。

やはり予想通りであつたと、お顔色を見て、ますますお心が動くように話し続けなされる。

「ところで、その来たお返事は、どうしてお見せ下さらなかつたのですか。わたしだつたなら」とお恨みになる。

「そうです。実にいろいろと御覧になるような一部分さえ、お見せ下さらない。あのあたりは、このようにとても陰気くさい男が、独占していてよい人とも思えませんが、きつと御覧に入りたい、と存じますが、どうしてお訪ねなされることができましょう。気軽な身分の者こそ、浮気がしたければ、いくらでも相手のいる世の中でございます。人目につかない所では多いようですね。」

それ相応に魅力のある女で、物思いして、こうそり住んでいる家々が、山里めいた隠れ処などに、自然といるようでございます。この申し上げるあたりは、たいそう世間離れた聖ぶつで、こつこつしたようであろうと、長い間、軽蔑しておりまして、耳をさえ、止めませんでした。

ほのかな月光の下で見た通りの器量であつたら、十分なものでしょうよ。感じや態度は、それはまた、あの程度なのを、理想的な女とは、思うべきでしょう。」

などと申し上げなされる。

しまいには、本気になつてとても憎らしく、並大抵の女に心を移しそうにない人が、このように深く思つてゐるのを、いい加減なことではないだろう」と、興味をお持ちになることは、この上なく高まつた。

「さらに、またまた、よく様子を探して下さい。」

と、相手を勧めなさつて、制約あるご身分の高さを、疎ましいまでに、いらだたく思つていらつしやるので、おもしろくなつて、

「いや、つまらないことばいいます。暫くの間も、世の中に執着心を持つまい思つておりますこの身で、ほんの遊びの色恋沙汰も気が引けますが、我ながら抑えかねる気持ちが起こつたら、大いに迷惑違いのことも、起こりましよう」

と申し上げなさると、

「いや、まあ、大げさな。例によつて、物々しい修行者みたいな言葉を、最後まで見てみたいものだ」

と言つてお笑いになる。心の中では、あの老人がちらつと言つた話などが、ますます心を騒がせて、何となく物思いがちなのに、心をとめかすことも、美しいと聞く人のことも、どれほど心にも止まらないのだった。

第四章 薫の物語 薫、出生の秘密を知る

「第一段 十月初旬、薫宇治へ赴く」

十月になつて、五、六日の間に、宇治へ参られる。

「網代を、この頃は御覧なさい」と、申し上げる人びとがいるが、

「どつして、その蜉蝣とはかなさを争うような身で、網代の側に行つてか」と、お省きなさつて、例によつて、たいそうひっそりと出立なさる。気軽に網代車で、かたりの直衣指貫を仕立てさせて、ことさらお召になつていた。

宮は、お待ち喜びになつて、場所に相応しい饗応など、興趣深くなさる。日が暮れたので、大殿油を近くに寄せて、前々から読みかけていらした経文類の深い意味などを、阿闍梨も下山してもらい、釈義などを言わせなさる。少しもうつととなさらずに、川風がたいそう荒々しいうえに、木の葉が散り交う音、水の響きなど、しみじみとした情感なども通り越して、何となく恐ろしく心細い場所の様子である。

明け方近くになつたらうと思つ時に、先日の夜明けの様子が思い出され

て、琴の音がしみじみと身にしみるといふ話のきつかけを作り出して、

「前回の、霧に迷わされた夜明けに、たいそう珍しい楽の音を、ちよつと拝聴した残りが、かえつていつそう聞きたく、物足りなく思つております」などと申し上げなさる。

「美しい色や香も捨ててしまつた後は、昔聞いたこともみな忘れてしまひました」

とおつしやるが、人を召して、琴を取り寄せて、

「まことに似合わなくなつてしまつた。先導してくれる音に付けて、思い出されようかしら」

と言つて、琵琶を召して、客人にお勧めなさる。手に取つて調子を合わせなさる。

「まつたく、かすかに聞きましたものと同じ楽器とは思われません。お琴の響きからかと、存じられました」

と言つて、気を許してお弾きにならない。

「何と、まあ、口の悪い。そのようにお耳にとまるほどの弾き方などは、どこからここまで伝わつて来ましよう。ありえない事です」

と言つて、琴を掻き鳴らしなさる、実にしみじみとぞつとする程である。一方では、峰の松風が引き立てるのである。たいそうおぼつかなく不確かなようにお弾きになつて、趣きがある。曲目を一つだけでお止めになつた。

「第二段 薫、八の宮の娘たちの後見を承引」

「このあたりに、思いがけなく、時々かすかに弾く箏の琴の音は、会得しているのか、と聞くこともございますが、気をつけて聴くことなどもなく、久しくなつてしまつたな。気の向くままに、それぞれ掻き鳴らすらしいのは、川波だけが合奏するのでしょうか。もちろん、きちんとした拍子なども、身についてない、と存じます」と言つて、お弾きなさい」

と、あちらに向かつて申し上げなさるが、思いもかけなかつた独り琴をお聞きになつた方さえあるのを、とても未熟だろつ」と言つて引き籠もつては、すっかりお聞きにならない。何度もお勧め申し上げなさるが、何かと言ひ逃れなさつて、終わつてしまつたよつなので、とても残念に思われる。

この機会にも、このように妙に、世間離れたように思われて暮らしている様子が、不本意なことだと、恥ずかしくお思ひになつていた。

「誰にも何とかして知らせまいと、育てて来たが、今日明日とも知れない寿命の残り少なさに、何といつても、将来長い二人が、落ちぶれて流浪すること、これだけが、なるほど、この世を離れる際の妨げです。」

と、お話しなされるので、おいたわしく拝見なされる。

「特別のお後見、はつきりした形ではございませんでも、他人行儀でなくお思いくださつていただきたく存じます。少しでも長く生きております間は、一言でも、このようにお引き受け申し上げた旨に、背きますまいと存じます。」などと申し上げなされると、「とても嬉しいこと」と、お思ひになりおっしゃる。

「第三段 薫、弁の君の昔語りの続きを聞く」

そうして、払暁の、宮がご勤行をなさる時に、あの老女を召し出して、お会いになつた。

姫君のご後見として伺候させなされて、弁の君と言つた人である。年も六十に少し届かない年齢だが、優雅で教養ある感じがして、話など申し上げる。

故大納言の君が、いつもずっと物思ひに沈み、病氣になつて、お亡くなりになつた様子を、お話し申し上げて泣く様子はこの上ない。

「なるほど、他人の身の上話として聞くのでさえ、しみじみとした昔話を、それ以上に、長年気がかりで、知りたく、どのようなことの始まりだったのかと、仏にも、このことをはつきりとお知らせ下さいと、祈つて来た効があつてか、このように夢のようなしみじみとした昔話を、思いがけない機会に聞き付けたのだらう」とお思ひになると、涙を止めることができなかつた。「それにしても、このように、その当時の事情を知っている人が生き残つていらつしやつたよ。驚きもし恥ずかしくも思われる話について、やはり、このように伝え知つている人が、他にもいるだらうか。長年、少しも聞き及ばなかつたが」とおっしゃると、

「小侍従と弁を除いて、他に知る人はございませんでしょう。一言でも、ま

た他人には話しておりません。このように頼りなく、一人前でもない身分でございませうが、昼も夜もあの方のお側に、お付き申し上げておりましたので、自然と事の経緯をも拝見致しましたので、お胸に納めかねていらつしやつた時々、ただ二人の間で、たまのお手紙のやりとりがございました。恐れ多いことですので、詳しくは存じ上げません。

「ご臨終におなりになつて、わずかにご遺言がございましたが、このような身には、処置に窮しまして、気がかりに存じ続けながら、どのようにしてお伝え申し上げたらよいかと、おぼつかない念誦の折にも、祈つておりましたが、仏はこの世にいらつしやつたのだ、と存じられました。

御覧入れたい物がございませう。もう必要がない、いっそ、焼き捨ててしまひましょうか。このように朝夕の露のようにいつ消えてしまふかも分からない身の上で、放つておきましたら、他人の目にも触れようかと、とても気がかりに存じておりましたが、この邸辺りにも、時々、お立ち寄りになるのを、お待ち申し上げるようになりますから、少し頼もしく、このような機会もあるうかと、祈つておりました効が出て参りました。まつたく、これは、この世だけの事ではございませう」

と、泣く泣く、こまごまと、お生まれになつた時の事も、よく思い出しながら申し上げる。

「第四段 薫、父柏木の最期を聞く」

「お亡くなりになりました騒ぎで、母でございました者は、そのまま病氣になつて、まもなく亡くなつてしまひましたので、ますますがっかり致し、喪服を重ね重ね着て、悲しい思いを致しておりましたところ、長年、大して自分の良くない男で思いを懸けておりました人が、わたしをだまして、西海の果てまで連れて行きましたので、京のことまでが分からなくなつてしまつて、その人もあちらで死んでしまひました後、十年余りたつて、まるで別世界に來た心地で、上京致しましたが、こちらの宮は、父方の關係で、子供の時からお出入りした縁故がございましたので、今はこのように世間づきあいできる身分でもございませうが、冷泉院の女御様のお邸などは、昔よくお噂をうかがつていた所で、参上すべく思ひましたが、体裁悪く思わ

れまして、参ることができず、深山奥深くの老木のようになってしまうたのです。

小侍従は、いつか亡くなったのでございませう。その昔の、若い盛りに見えました人は、数少なくなつてしまつた晩年に、たくさんの人に先立たれた運命を、悲しく存じられながら、それでもやはり生き永らえております」

などと申し上げているうちに、いつものように、夜がすっかり明けた。

「もうよい、それでは、この昔語りは尽きないようだ。また、他人が聞いていない安心な所で聞こう。侍従と言つた人は、かすかに覚えているのは、五六歳の時であつたらうか、急に胸を病んで亡くなつたと聞いている。このような対面がなくては、罪障の重い身で終わるところであつた」などとおっしゃる。

「第五段 薫、形見の手紙を得る」

小さく固く巻き合わせた反故類で、黴臭いのを袋に縫い込んであるのを、取り出して差し上げる。

「あなた様のお手で、処分なさいませ。わたしは、もう生きていられそうもなくなつた」と仰せになつて、このお手紙を取り集めて、お下げ渡しになつたので、小侍従に、再びお会いしました機会に、確かに差し上げてもらおう、と存じておりましたのに、そのまま別れてしまいましたのも、私事ながら、いつまでも悲しく存じられます」

と申し上げる。さりげないふうに、これはお隠しになつた。

「このよつな老人は、問はず語りに、不思議な話の例として言ひ出すのだらう」とつらくお思ひになるが、繰り返し繰り返し、他言をしない旨を誓つたのを、信じてよいか」と、再び心が乱れなされる。

お粥や、強飯などをお召し上がりになる。昨日は、休日であつたが、今日は、内裏の御物忌も明けたらう。冷泉院の女一の宮が、御病気でいらつしやるお見舞いに、必ず伺わなければならぬので、あれこれ暇がございませぬが、改めてこの時期を過ぎして、山の紅葉が散らない前に参る」旨を、申し上げなされる。

「このよつに、しばしばお立ち寄り下さるお蔭で、山の隠居所も、少し明るくなつた心地がします」

などと、お礼を申し上げなされる。

「第六段 薫、父柏木の遺文を読む」

お帰りになつて、さうそくこの袋を御覧になると、唐の浮線綾を縫つて、「上」という文字を表に書いてあつた。細い組紐で、口の方を結んである所に、あのお名前の封が付いていた。開けるのも恐ろしく思われなされる。

色とりどりの紙で、たまに通わしたお手紙の返事が、五、六通ある。それには、あの方のご筆跡で、病が重く臨終になつたので、再び短いお便りを差し上げることも難しくなつてしまつたが、会いたいと思つて気持ちが増して、お姿もお変わりになつたというのが、それぞれに悲しいことを、陸奥国紙五、六枚に、ぽつりぽつりと、奇妙な鳥の足跡のように書いて、

「目の前にこの世をお背きになるあなたよりも、お目にかかれずに死んで行くわたしの魂のほつが悲しいのです」

また、端のほうに、

「めでたく聞いております子供の事も、気がかりに存じられることはありませんが、生きていられたら、それをわが子だと見ましようが、誰も知らない岩根に残した松の成長ぶりを」

書きさしたように、たいそう乱れた書き方で、小侍従の君に「と表には書き付けてあつた。

紙魚という虫の棲み処になつて、古くさく黴臭いけれど、筆跡は消えず、まるで今書いたものとも違わない言葉が、詳細で具体的に書いてあるのを御覧になると、なるほど、人目に触れでもしたら大変だつた」と、不安で、おいたわしい事どもなのである。

「このよつな事が、この世に二つとあるだらうか」と、胸一つにますます煩悶が広がつて、内裏に参らうとお思ひになつていたが、お出かけになることができない。母宮の御前に参上なされると、まうたく無心に、若々しい様子で、読経していらつしやつたが、恥ずかしがつて、身をお隠しになつた。どうして、秘密を知つてしまつたと、お気づかせ申そう」などと、胸の中

に秘めて、あれこれと考え込んでいらっしやった。